

初公開

# 家光の鶏、家綱の鶏

「へそまがり日本美術 禅画からヘタウマまで」追加出品



四代將軍  
徳川家綱《鶏図》



三代將軍  
徳川家光《鶏図》



ペタペタ歩く鶏



徳川家綱

鶏図

紙本着色 一幅

縦二・一寸 横二・一寸

江戸時代前期(17世紀後半)

義源寺(東京都文京区)蔵

家光の『木曳図』(34)と同じく、  
養源寺に伝わった作品。同寺は、  
家光の乳母、春日局の子、稻葉正  
勝の創建。江戸時代の画家伝『古  
画備考』の家綱の項によると、こ  
の絵はかつては春日局の兄の子  
孫、斎藤利直が秘蔵していたとい  
う。墨の滲みを味わいとして、背  
のあたりは塗り込めずに筆先で  
丁寧に点描を置き、首は灰色で  
表している。一見稚拙と思われる  
かもしけないが、細やかな表現  
が見て取れる。父の鶏と同様に、  
こちらも足の描写が心をつかむ。  
目つきが悪くなってしまうのは  
家綱の特徴だが、もはや持ち味  
だと自覚していたかもしれない。

# まるで鶏の絵かき歌

徳川家光

鶏図

紙本墨画 一幡

縦二六・九cm 橫四一・七cm  
江戸時代前期(17世紀前半)

個人蔵



水戸徳川家の重臣、三木之次の  
家に近年まで伝わっていたもの。  
箱に貼られた紙には「大猷院殿  
家光公御筆」と書かれている。  
『木兔図』(84)などの細かさとは  
別世界。二十ほどの線で体と尾  
羽を描き、頭と足を付け加えれ  
ば出来上がる。シンプルなだけに  
表情がポイントとなるが、目つき  
の鋭い家綱の鶏とは違い、丸くて  
とぼけたような目が特徴だろ  
う。片足を上げて歩む描写に気  
づけば、胸がキュンとなる。





高橋等庵  
『東都茶会記 五』  
(淡交社、1989年)より

高橋等庵  
『東都茶会記 五』  
(淡交社、1989年)より

家光の絵は、将軍直筆の絵として  
はもちろん、その趣からも大切にさ  
れた。

大正8年11月1日、実業家で茶人  
の高橋等庵が、向島の水戸徳川家邸  
内にある嬉森庵で「木兎茶会」を催  
した。家光の木兎の絵が当日の掛物  
である。茶会記によると、「家光が帰依  
した禅僧・沢庵宗彭の贊があり、『千  
鈞の(極めて価値のある)筆力で羽毛  
の軽やかなさまを描く』などと書か  
れていた」という。

茶会記には、等庵がこれを旧会津  
藩主の松平家から入手した経緯も  
書かれている。同家の家祖で、家光の  
異母弟である保科正之が、家光の病  
氣全快祝いのために登城した時のこと  
と。家光は機嫌よく木兎を描き、同  
席していた沢庵に贊を書かせ、掛軸  
に仕立てたうえで賜ったという。大切  
なものを移譲することに反対する松  
平家の関係者もいたが、等庵は五千  
円という大金で手を入れた。この絵  
の行方が気になるところである。

## 大正8年の「木兎茶会」

家光の絵は、将軍直筆の絵として

はもちろん、その趣からも大切にさ  
れた。

上は鶏とも言われ、一作ごとにさまざまな描き方を探求した、まさしく「鶏の画家」である。『徳川実紀』には、家綱が2歳から11歳までの間、3月に度々飼鶏を見た記録があり、その際、市中や大名から「若君(家綱)」のために鶏が献上されることもあった。小さい頃から鶏が好きだったらしい。

鶏に限らず、家綱の絵は決して上手ではない。描いた年がわかるものが多く、全て子供の頃に描いた絵では、と疑いたくなるが、どうやら違うようだ。例えば『寛政重修諸家譜』には、自らの絵を大名に下賜した記録が多々あり、幼少期から晩年まで描いたことがわかる。つまり、技術的に上達した形跡はなく、生涯このスタイルだったのだろう。將軍ならではの「下手で何が悪い」様式で突き進んだ画家人生だった。

絵を嗜んだ徳川將軍の中でも、突出して創作性に溢れる家光と家綱。二人の絵は一見ぎごちないが、「ヘタウマ」の一言で片付けてしまったら、彼らの創作意図も、そして当時の美術作品としての輝きも見逃してしまう。

家光の最大の特徴は、『木兎図』(84)や『兔図』(85)にみられる迫真性の追求。既存の描き方にもよらない、自身の目だけが頼りの、「家光アリズム」とも呼ぶべき孤高のスタイルである。けれども魅力はそれだけではない。この『鶏図』は、対照的に簡略そのもので、線一本とっても流麗ではないが、だからこそ、とぼけた味わいを醸し出す。「ヘタウマ」的な味は、家光の意図するところだったろう。創作上のヒントとしては、松花堂昭秉が茶席に飾る「茶掛け」として描いた、シンプルで小さく愛らしい水墨画も思い浮かぶ。

しかし、鶏といえば、やはり息子の家綱だ。作品の半数以